沈周の生涯と「幽憂不平の志」

内山知也

一　まえがき

沈周[1]（一四二七―一五〇九）は、明代中期の文人であり画家である。彼の名は、中国文学史では特筆されることはないが、絵画史では明代呉派の巨匠として、世界にその名を知られている。また書家としても有名であり、詩・書・画の三つの芸術が融合して、渾然とした境地を創り出している。

王家誠[2]氏は、中国の画家の性格を二種類に分類した。その一は、もっぱら文人雅士と交際して、俗人を近づけず、もちろん自作の画などは売ろうとも思わないような人。その二は、精神的打撃を受けて官界を憎み、世を憤り、高官や富豪にはよほど気分がよくなければ画は売らず、かえって、純朴豪爽な庶民農民を愛し、喜こんで彼等のために描くような人である。ところが、沈周は、この二種類の画家の特性の中、全く極端な性格は備えていず、容易に親しめる人である。農夫や小商人が彼に画を求めても、拒絶など全くしなかった。ひどい話になると、彼の作品を模倣して、もうけようと考えた男が、売値を倍加するために、彼に贋作の上に題字落款を求めても、彼は言うとおりに題署してやったと言われるほど、円転滑脱な人物であった、と述べている。

たしかに、沈周は人に対して優しい人であった。おそらく自分が傷つくことを恐れる以上に、他人に不快感を与えまいと努力した人のように思われる。こんなエピソードが伝えられている。――沈周の家にはあまり蓄えと

いうほどのものはなかったが、他人が困るとすぐ助けてやるのだった。隣家の者が、失せ物をし、まちがって沈周の家の品物を、自分の家の品物だと言いはった。沈周はすぐその品物を与えて帰した。やがてまちがいとわかって還しに来た隣人を見て、笑いながら「あなたの物ぢゃありませんか」と言った、――と。[3]

しかし、沈周の詩集、石田先生集を読んでみると、前述のようなエピソードにもかかわらず、彼の心の底には「幽憂不平の志」がわだかまっていることにつき当らざるを得ない。ただ彼は隠者の生活を送っているから、その感情が激しないだけである。こういう私の感想が突飛なものでないことは、すでに彼の在世中に、それと指摘する人たちがあった。例えば、成化甲辰二十年(一四八四)に、章軒という人は、「春雪・秋興の諸詩を観れば、則ち啓南の憂国の忠を知る」[4]と言っているし、弘治甲子十七年(一五〇二)には、張鉄という人も、「後世の詩人、杜(甫)を学ぶ者少なからず。その志を立てずして、徒らにその詞を攻む。われいまだ、その杜を能くするを見ざるなり。石田先生は古の逸民なり。世を遯れ悶することなしといふと雖も、時を憂へ、俗を憫れむの志は、いまだかつてこれを方寸より去らず。凡そ、中に感ずるありて、志に動かず、辞に形はれざるはなし。故にそれ杜たり。必ずしも篇に倣ひ句に傚へず。而して杜もとより在るなり」と言っている。

隠者でありながら、ひそかに憂世の情を歌う芸術家の一見矛盾した生きざまを、彼の作品と逸話、批評を中心として考察するのがこの小論の主題である。

二　沈周の生涯と芸術

沈周は、字を啓南と言い、石田とも白石翁とも号する。長洲県相城里(今の蘇州)の人である。明の宣徳二年(一四二七)に生まれ、武宗の正徳四年(一五〇九)に歿した。八十三歳の長寿であった。彼はその長い生涯を「抗隠」として一度も仕官せず、一貫して詩画をもって民間に隠れ住んだ。

明史巻二九八隠逸伝中の沈周伝や、王鏊撰の墓誌銘、文徴明撰の行状によると、彼の祖父澄は、永楽年間(一

四〇三―二四）挙人に合格したが、官途につかず、西荘と称する自分の住居に、毎日のように酒宴を催して賓客を招いたので、世人は澄のことを、元の隠士顧徳輝（仲瑛）の再来と噂した、という。澄がそのような豪勢な生活ができたのは、おそらく曾祖父の良琛が、このあたりを開田し、大地主となっていたからだろう。祖父澄（孟淵）は二人の男子をもうけた。上を貞吉、下を恒吉といった。この二人も仕官せず、詩文の誇れが高かった。恒吉は同斎と号し、三子を生んだ。沈周はその嫡男であった。

沈周の容姿について、行状は「娟秀玉立、聡明人に絶す」と、いかにも女性的な可愛いい少年であったかのように記しているが、壮年、老年に及んだころの彼は、「面寛く、高き顴（骨）、削れたる頤、鬚は甚しくは長からず」[5]と清の阮元に記され、又「風神散朗、骨格清古、碧眼飄鬚、儼として神仙の如し」[6]と清の銭謙益に記されている。王家誠氏は、沈周が「碧眼」だったということ説明に困惑して、次のように解釈した。「碧眼とは、紺青色の眼であり、達摩が碧眼の胡僧と称せられているように、わが国では古来外人を指して碧眼と言った。おそらく、この碧眼の江蘇長洲の人は、容貌が非凡であって、西域またはインドから伝来した羅漢像に似て、儼として神仙のようだったので、そう言ったのであろう」と。

しかし、これは私の想像にすぎないが、彼の血液には本当に西域人の血が混っていたのではないかと思う。その根拠としては、訓導陳頎の撰に成る「同斎墓誌」に、「沈氏の族は、最も元末に盛なりしも、兵乱ありて、家業蕩析す。良琛始めて振起し、孟淵克く之を復す。詩書礼義を以て業となす。その燕間に当っては、父祖子孫、一室に相聚まり、古今を商榷し、情を詩に発す。倡あり和あり、儀度文章、雍容として詳雅なり。四方の賢士大夫、風を聞いて門に踵まり、その礼を観んことを請ひ、殆ど虚日なし。三呉一時の盛族、相城の沈氏を推して最となす」とあり、どうも元末江南の大富豪だった沈万三の末裔らしく思われるのである。沈万三は、元末海外貿易で産を成し、蘇州府下の三分の二に当る田を所有していたといわれる大富豪だったが、元末明初、蘇州に拠って王国を築いた張士誠の外戚となり、士誠のために巨額の投資をしたため、士誠が明の太祖朱元璋と闘い滅ぼされると、その財産を失ってしまったのである。沈万三が外国貿易をする間に、沈氏一族の中に西域人の血が混っ

たかもしれないというのは、その辺の所に想像の糸を結んでのことである。

沈周は富豪の末裔であり、儒学・文学・芸術の雰囲気に満ちた家族の中に育った。その他に沈家の著しい特色は、祖父の澄(孟淵)も父の恒吉(同斎)も共にすぐれた人物であり、学識もあり、官吏になる機会もあったのに、拒絶して仕官しなかったことである。楊循吉(一四五六―一五四四)の「呉中往哲記」に、「沈孟淵、薦めらるるも官を受けず。好んで自ら標致し、恒に道衣を著て、林館の間に逍遙す。毎日数筵を設け、酒食以て客を待す。もし客なければ、則ち人をして渓上に望ましむ。ただ至らざるを恐るればなり。貞吉・恒吉も皆唐律に工にして、兼て絵事を善くす。一詩を賦し、一障を営むごとに、必ず月を累ね歳を閲し、乃ち出だす。銭帛を以て購取すべからず。故に尤だ以て得ること少なり。家庭の間、自ら相い唱酬するを重んず。下僕隷に至るまで、悉く文墨を諳んず」と述べているように、父祖の家庭は、王家誠氏が分類した前者の文人タイプをとるものであった。彼等は名士文人とでなければ交際しなかったから、下男でも来客の応待に詩文の教養を必要としたのである。また呉寛の「隆池阡表」には、「同斎、貌厚くして神清く、温然たる美玉なり。居る所の窓几は明潔にして、器物古雅なり。而して奇石嘉樹、庭戺に掩映し、儼として画中の如し、風日清美なれば、毎に古き冠服を被り、楼に登って眺望す。神情爽然たり。或いは時に扁舟もて城に入るも、留止するは必ず僧舎。香を焚き、茗を瀹て累夕返るを忘る。絵事を善くし、妙処は宋人に逼る。然れども自重して苟に作らず。また詩を為るを善くし、落筆誦すべし」と、父の性格と日常が描かれている。こうした恒吉の性格はやはり父の澄から受けついだもので、呉寛が同じく「隆池阡表」に、澄は永楽の初めに人才を以て徴引されたが、病気を理由に江南に帰臥した。貞吉・恒吉ともに翰林検討の陳嗣初に学んだ。沈家は澄以降、高節を以て自ら持し、仕進を楽しまず、子孫はそれを家法とした、と言っているのを信じれば、彼等が仕官しなかったのは、「家法」でもあったからであった。しかし、これらの資料だけでは、なぜ沈家が仕官しないことを「家法」にしなければならなかったかの理由はわからない。そこで、これもまた私の想像であるが、沈万三が張士誠と縁組みし、その為に沈一族が痛烈な打撃を受けたこと、および明政府によって蘇州は格別苛酷な税を課せられ、数十年というものは、極端な疲弊状態に陥

ったこと、そういう、おぞましい過去が、再興した沈家を臆病にしたのではなかったろうか、と考えさせる。少くとも明初には、太祖が一たん礼聘した儒学文学の士を、次々と処罰したため、才能ある人士はみな韜晦して、官界から遠ざかるという長い時期があった。しかし明代中期ともなれば、呉の周辺からも次第に官途につく人が増加し、李応禎（一四三一―九三）や呉寛（一四三五―一五〇四）王鏊（一四五〇―一五二四）のような中央の高官に昇った人もあったのに、沈家は依然として「家法」を守っていたのである。明史沈周伝は、そういう沈家の人たちを「並びに抗隠す」と言っている。抗も隠も、ともに官界に背を向けて、民間に隠棲することを意味する。

さて、沈周の父は有竹居と称する書斎を構築し、同村の儒者で陳寛字は孟賢という人について子供たちを学習させた、と明史には述べられている。しかし、彭礼の「石田詩引」には、「成化辛卯（成化七年・一四七一）啓南既に有竹居を結ぶ」とあるから、有竹居は沈周が四十五歳ころ造った別荘の名なのである。

かくて、沈周は十一歳[7]のとき、南都（南京）に遊び、百韻の詩を作って、巡撫侍郎崔恭に奉った。驚いた・恭は直接会って、鳳凰台賦を課題に出してテストしたところ、沈周は筆をとるやたちどころに書きあげたので、大いに感動した、と明史伝には記している。沈周が十一歳の時と言えば、英宗の正統三年（一四三八）である。かつ崔恭は、明史巻一五九崔恭伝によれば、正統元年（一四三六）の進士合格で、その後戸部主事に除せられ、地方を転転とし、李秉（へい）に代って蘇松諸府の巡撫になったのが、英宗の天順二年（一四五八）以降のことであり、呉県志巻六の巡撫の項は、天順二年としている。従って明史伝のこの記事はどこかおかしいのであり、しかも抗隠を家法とした沈家のおきてに負くことになって、前の記事とも矛盾を生じている。

やがて成長すると、文章は春秋左氏伝を、詩は白居易・蘇軾・陸游を模擬し、書は黄庭堅を学び、特に絵画がうまく、明代第一人者の評判をとった、と明史伝に記されている。

沈周の散文作品は、その詩詞に比べて、少ししか遺っていないが、その散文を最初に称揚したのは、楊循吉[8]であった。循吉は呉県の人で字を君謙といい成化二十年（一四八四）の進士で、礼部主事となったが、多病のため退官し、郷里で文人としての生活を送った。性格狷隘で、人の批判を好んだといわれるこの詩人は、郷里の先輩沈

周の散文を褒めて、「石田先生は、けだし文章の大家なり。その山水樹石は、ただその餘事のみ。而るに世、乃ち専ら此を以て之を称す。あに寃ならずや」と言っている。この批評を自著「南濠詩話」に採録した都穆(一四五九―一五二五)は、「李文正(李東陽)・呉文定(呉寛)の輩の如き、倶に先生の画を以てその詩を掩はるるを惜しむ。独り君謙(楊循吉)断じて以て文章の大家と為す。当時先生を知る者、いまだ君謙の如く卓然たりし者あらざるなり。今、先生の集中の文を読むに、君謙まことに具眼と謂ふべし」と言い、沈周の散文の実力を高く評価している。

具体的にどのような作品を指して楊循吉が褒めたのかわからないが、いま、「石田先生文鈔」を読んで、私の好みから言うと、弘治八年(一四九五)七月十三日に死んだペットの鸚鵡のために書いた「緑衣生埋銘」、野菜のために書いた「介夫伝」、楊梅のために書いた「楊梅伝」などは、韓愈の「毛穎伝」の系統を汲む戯作の文章で、ユーモアに富んでいるし、弘治五年壬子(一四九二)六月二十七日病臥中に見た夢を記録した文「記夢」などは、いかにも話好きな沈周らしく、夢の中にまで多くの客人が出てきて、彼が口から出まかせの詩を吟ずると、満座の人たちは「好好」と褒めた、と楽しげに、しかも不思議そうに書いている。それらは。無駄のない簡潔な古文であり、背後に古典に関する深い学識を感じさせる名文である。

沈周の絵画について、江兆申氏は「双谿読画随筆」において、沈周の画風の変遷をこう説明している。「四十歳から五十歳の頃の沈周の画は、王蒙・黄公望に心酔し、用筆は細緻雅淡で、濃淡枯湿の度合いが相当整っている。五十歳になると、北派の画に傾き、南宋の馬遠・夏珪から明初の戴進に至る用筆に傾き、濃墨粗筆で、線は直線的になり、次第にきびしいかすれを伴う。六十五歳以後は、呉鎮・米芾・米友仁・高克恭(元の画家・号は房山)の方に移ってゆき、湿墨が次第に多くなり、時には構景があり、雨後のぼんやりとした趣を追求する。七十五歳前後は、沈周の最高峰である。弟子の周用は、『沈啓南の画は筆筆焦墨、人摹搨し易く、一時の偽作甚だ多し。然れども、得具眼者は、蹊径了然として、自ら別つこと難からざるなり』[10]と言っているが、筆筆焦墨で模搨しやすいのは、沈周の一時期の作風にすぎず、一面にすぎないのである、」と。

沈周の絵画に対して、ひどく厳しい悪評を下したのは明末の李開先である。[11] 李開先は「中麓画品」[12]において、当時の画家の気質を論じ、「沈石田は山林の僧の如し。枯淡の外、別に有する所なし」と言い、沈周には詩人的気質に欠けているので、その絵画も潤いに欠けていると主張した。また、画には四病(四つの欠陥)があり、第一の僵筆、第二の枯筆、第三の濁筆、第四の弱筆のうち、沈周の絵画は、第一の部類に山水人物画が、第三の部類に山水人物画が、第三の部類に山水画が入る、とその槍玉に上げている。李開先は沈周の絵が、元の呉鎮や王蒙の画を学んでいる点を指摘し、その枯淡さを否定したのだが、その逆に王世貞(一五二六―九〇)は「王氏書画苑」の中で、そういう点を優れていると褒めているくらいなので、これらの批評は、大概時代や個人の好尚によるものであることがわかり、大した根拠のないものであると言えよう。従って、江氏のような分期説に従った方が正しく、かつ江氏の「文徴明年譜」[13](文徴明和蘇州画壇)は、沈周四十四歳以後の作品および行実にも詳しいので精密であり実証的である。

沈周の愛弟子文徴明(一四七〇―一五二二)は、沈周の青壮年時代の絵画を見て、こう題している、「石田先生は風神玄朗、識趣甚だ高し。その少き時より、作画すでに家習を脱去す。上は古人を師とし、模臨する所あれば輒ち真跡に乱ふ。然れども為る所はおおむね盈尺の小景なり。四十の外に至りて、始めて拓して大幅を為る。粗株大葉、草草にして成る。天真爛発すと雖も、規度点染はまた向時の精工ならず。[14](下略)」これは、沈周の四十歳前後に描いた王蒙(?―一三八五)の画の模写に題された文章だが、彼がなみなみならぬ模写の腕を持っていたことに敬意を表しているのである。臨模から入って、次第に独自の筆法構景を生み出してゆくのが、当時の画学の研修法だったから、模写能力は即ち画才の有無を示すものだった。

沈周の画名は晩年に向うほど高くなった。彼は画の依頼者に対して、特に意識的に拒否する態度を示さなかったから、絹や紙を携えて揮毫の依頼に来る者が跡を絶たなかった。彼の風流画人の日常を、墓誌にはこう記している、「相城は長洲の東偏に居り、其の別業を有竹居と名づく。黎明ごとに、門いまだ闢かざるに、舟すでに港を塞ぐ。間に事を以て城(蘇州城)に入れば、必ず地の奥僻なる者を択んで、これに潜む。好事者すでに之を物色

し、至るころには、則ち屨戸外に満つ。先生の高致は人を絶し、而して和易にして物に近づく。販夫・牧豎、紙を持して来り索むるも、難色を見はさず。或は贋作を作りて、題を求め、以て售らんとするも、亦た楽然として応ず。近くは京師より、遠くは閩・楚・川・広に至るまで、其の蹟を購入して、以て珍玩と為さざるはなし。風流文翰、一時に炤映し、其れまた盛なり。」このような千客万来の中に、作画生活は続けられた。行状には同様にその生活を次のように記述している、「先生居る所を去ること里餘に別業を作り、有竹居といふ。其の間に耕読す。佳時勝日には必ず酒殽を具へ、近局を合し、従容として談笑す。蓄ふる所の古図書・器物を出し、相いともに撫玩し、品題して以て楽みと為す。晩歳、名ますます盛にして、客至るものもまたますます多く、戸に屨つねに満つ。先生既に老ゆるも、聡明衰へず、酬対すること終日なるも、少しも倦まず。風流文物、百年来、東南の盛なりしは、蓋し之に過ぐる者あるなし。」このような画業の盛況は、彼の弟子の唐寅(一四七〇―一五二三)が、毎日の雨のために画を買いにくる客もないと嘆いたのと、およそ正反対であった。

沈周の書斎には、依頼客の紙や絹の束が山のように積まれており、彼はそれを消化するのに苦しんだ。黄応竜の画記[14]に、「嘗て翁の読書する処に至るに、剡藤を束ぬること万箇、鵝渓を畳むこと満篋、人に旦に催され、夕に迫らるること、夙に旧欠を逋ひ、逃避する所なきが如し。因って指さして曰く、『吾、此の債ありて休せず。吾死せば則ち已まん』と」という惨憺たる様子が記されている。これも人の熱望を拒否できない沈周の優しさが招いた禍なのである。また、めったに旅行しない沈周なのに、たまたま西湖の宝石峯の僧舎に宿泊したところ、たちまち画を求める人が集まり、大いに困惑している所を、劉邦彦にすっかりからかわれ「紙を送り門を敲き画を索むること頻りなり／僧楼処として紅塵を避くるなし／東帰して了せんと要す南游の債／須らく金仙百億の身に化すべし／」という詩を奉られてしまったという逸話もある。[16] 何とか沈周の画を手に入れようとする人はいろいろな手段を弄する。沈周が怪談異聞が好きだと聞いて、沈周を訪ね、鬼や怪物の話をし、種がなくなると、あちこちの種を集めて、いい加減な話をでっちあげたりする人が多かった、という逸話もある。[17] こういう逸話は、沈周が金銭の多寡で画を売ろうとはしなかったことを伝えるものである。呉寛は「題石田画」[18]の詩に、「石翁の

足蹟は只だ呉中／意到れば自ら工不工を忘る／」と歌い、「楊起の為に同に沈石田の謝雪村の山水に擬するに題す」の詩に、「石田画を作るも銭にて売らず／給事の之を得たるは真に縁あり／」と歌っている。呉寛は中央の高官であったが、父の喪などで帰郷すると、親しく往来贈答した仲であったから、沈周の性向をよく観察している。

沈周の文名、画名が揚ると、蘇州知府は彼を賢良方正に挙げようとする。しかし沈周は自ら占筮して、隠遁を決意した、と明史伝は記す。沈周にこのような招きのあった時期は、明会要巻四九選挙三の項によれば、おそらく弘治六年(一四九三)沈周六十七歳のことであろうと思われる。その年、孝宗は天下に詔して才徳の士で山林に隠棲している者を挙用したのである。明会要によれば、この時、潘辰という人が挙用され、翰林待詔を授けられたとあるが、その他は、一応官人として資格を持った者だったようである。時の蘇州知府は史簡という人物である。[19] 自分の進退を占筮で決定するというのもいかにも鬼神の話を好んだ沈周らしい。

沈周は親孝行の人であったから、父恒吉が成化十三年(一四七七)五十一歳の時に死去してからは、一層母に孝養を尽して、仕官の誘いを拒絶した、と明史伝は記しているが、前述の話が弘治六年とすれば、わざとらしい感じが残るし、母に対する孝養の念に翳りが射す。巡撫の王恕[20]や彭礼[21]が沈周を幕僚に任用しようと礼敬したが、母が老いたことを理由に辞退したとも明史伝には記す。これら巡撫の招聘は彼等の着任の時期から推せば、すべて沈周の七十歳後半の事に属する。

このように壮年より晩年にかけての長い期間、沈周の画名は揚る一方であり、そのために揮毫を求める人士、交際のために来訪する人の応対に沈周は忙殺されたのである。又、彼の名は蘇州出身の高官により、次第に中央官僚にも知られ、蘇州を経過する官人たちは、沈周の画を獲得することを熱望したのであった。例えば、程敏政(一四四五―?)など、左遷の途中とはいえ、弘治元年(一四八八)、蘇州を通り過ぎた時、沈周に幣物・墨・占いに使う蓍草などを贈り、揮毫を期待したが、四年たっても得られず、再三に亘って恨みがましい書簡を送っている。[22] また大変有名な逸話は、弘治十年から十二年(一四九七―九九)の間、蘇州知府だった曹鳳(一四五七―一五

〇九)は、沈周の名声を知らず、察院の壁画を描く画工の一員として、沈周を徴発した。沈周は、「賤しい仕事ですから、高官に会って免除してもらったらどうですか」という人のすすめもことわり、「義務として奉仕するのだから、恥しいことではない」と言って、労役に服した。曹鳳は入朝すると、尚書屠勲(一四四六―一五一六)が「沈先生はお元気ですか」と問うたり、宰相李東陽が(一四四七―一五一六)が「沈先生のお便りはありませんでしたか」と質問するものだから、返答もできずにどぎまぎしていた。しかし呉寛が気をきかせて、自分の所蔵していた画を曹鳳に与えて高官たちに届けさせ、「こちらへ来る時沈先生は病気だったものですから、便りはなかったのです」と答えさせ、やっと面子を保たせてくれた。曹鳳は蘇州に帰ると、すぐ相城に沈周に会いに行った。沈周はいかにも嬉しそうに曹鳳を歓迎し、少しも不平の様子を顔に出さなかった。その後、沈周はお礼の挨拶に役所に行き、名刺を置いただけで、曹鳳に会いもしないで帰ってきてしまった。[23] という話である。私はこの話に、七十歳を過ぎた老画家の、深く傷つけられた悲しみの痕を見る。老いてもなお一介の画工としてしか評価されなかった悲しみは又格別であったろう。しかし、彼はその屈辱を忍受した。相手を傷つけず、静かに微笑しながら一人傷ついていた。それから老年に及んで、しばしば儀礼的な招聘を受け、そのたびごとに辞退する時の沈周の思いは、どんなにか複雑なものがあったろう。それは沈周没後十四年も経たころ、翰林待詔として北京に召された五十四歳の文徴明が、意外の出費に困惑し果てたり、不慮の事件で皇帝の激怒に遇う所を危く免れ、「吾束髪にして文を為り、樹立する所あらんことを期せるに、竟に一第をも得ず。今また何ぞ能く強顔久しく此に居らんや。況んや事を事とする所なく、而も日に大官を食む、吾心まことに安んぜざるなり」と嘆いて、四年間の役人生活を罷め、蘇州に帰った、あの苦渋に満ちた気持よりはましであったかもしれない。

沈周が八十歳になった正徳元年(一五〇六)、母張太夫人は九十九歳の長寿を以て世を去った。文徴明の沈先生行状に、「母張夫人年ほとんど百齢、時に先生八十年なり。猶ほ孺慕してやまず。弟召、瘵を病み、内に処らず。先生ともに臥起すること歳餘。卒するに及び、其の孤を撫すること子の如し。庶弟圈、稺くしていまだ事に練ならず。植産を為して己に均しからしむ。一妹早に寡なり。之を養ひて其の身を終へしむ。其の天性の孝友なるこ

と此の如し」とあるように、百歳近い母に仕え、幼児のように甘える八十歳の老画家、肺病の弟のために別室で一年も一緒に暮らしてやり、その死後は遺児をわが子のように愛した。庶弟の生活も差別なく世話し、若く未亡人になった妹を生涯面倒み続けたのが沈周であった。彼の正夫人は陳氏。嫡男雲鴻は崑山県陰陽訓術となり、妾腹の子復は郡学生となった。三人の娘のうち長女は崑山県学生の許貞に嫁ぎ、次女は徐裏というものに、三女は呉江県出身の太学生史永齢に嫁いだ。そして孫は男一人女一人、曾孫は男一人女二人であった。しかし長男雲鴻は父周より先に世を去ったので、孫の履が喪主となった。家庭は平穏であった。

父の同斎は来客を好む明朗な人で、飲めば必ず酔っぱらった。沈周は飲める方ではなかったが、むりに酔っぱらって来客を喜ばせるのだった。行状にはまた、「先生、人となり修謹謙下、内に精明を蘊むといえども、少しも外に暴はさず。人と処りて曾て、乖忤するなきも、中は実は介り辨ちて、犯すべからず。然れども喜んで後進を奬掖し、寸才片善も、苟し以て其の意に当るあらば、必ず延誉を人に為して蔵せざるなり。尤だ人の疾苦緩急に忍びず。求むるあれば応ぜざる者なし、里党戚属、みな仰ぎ成らぐ」と彼の人格を述べている。彼は人を傷つけることを好まなかった。さまざまな性格の人物に会っても、争うことを好まなかった。彼は誰が好ましい人か、そうでない人かをすぐ見わけ、自分を侵されることはなかった。少しでも才能のある後輩は必ず褒めた。性格的に欠点だらけの唐寅や祝允明のような若者も、彼はその才能を愛し援助した。自分が困っても他人の苦境を見るにしのびず、乞われれば援助の手をさしのべた。だから、親族だけでなく、同郷人たちにとっても頼りになる人物だった。父の喜ぶことなら飲めぬ酒も無理に飲み、貧しい後輩の生活のためなら贋作にも署名してやった。ましておっとりした性格の文徴明などはどれほど沈周を敬愛しただろうか。行状の末尾近く、「某再世の游を辱くし、耳受目瞩、先生を知ること詳なりとなり」と、直接指導を受けたことを記し、「哭石田先生」の詩では「いまだ感恩酬死の志を遂げざるに／此の生の知己竟に長く違る」と詠じている。また沈周所蔵の名画、名筆、古銅器十数点を記録し、郭熙・蘇軾・黄庭堅・林逋・巨然・高克明・李成等の名を挙げていることは、文徴明が書画鑑賞の法をもまた沈周から学ぶ所が多かったことを物語るものである。(24)

三　沈周の「幽憂不平の志」

「呉派画九十年展」（国立故宮博物院刊）の二頁に、沈周「夜坐図」軸の画が掲載されている。実物は縦八四・八センチ横二一・八センチの紙本である。[25] 小高い山を背にし、数棟の質素な家が松や竹や濶葉樹に囲まれ、前景に小川が流れて、小さな橋が架けられている。中央の書斎には床几の上に端坐した人物、すなわち沈周自身がおり、その向って右手に卓子があり、卓上には燭台と一帙の書物が載っている。その他の棟の窓は開放されているが、室内には家具人物、畜獣の類は全く見えず、空は今明け放たれたばかりのようである。画の上半部には、沈周自記の「夜坐記」がびっしりと記されている。

「寒夜寝甚だ甘く、夜分にして寤む。神度爽然として、復び寐ぬる能はず。乃ち衣を披りて起坐し、一燈熒然として相対す。案上の書数帙あり。漫ろに一編を取りて之を読む。稍倦み、書を置き手を束ねて危坐す。久しき雨も新たに霽れ、月色淡淡として窗戸に映じ、四聴闃然たり。蓋し清耿の久しきを覚ゆ。漸く聞く所あり。風声の竹木を撼かすを聞けば、人をして特立不回の志を起さしめ、犬声の訧訧として苦しきを聞けば、人をして閑邪禦寇の志を起さしめ、小大の鼓声を聞けば、小なる者は薄くして遠き者は淵淵として絶えず、幽憂不平の志を起す。官鼓甚だ近く、三撾より以て四に至り、五に至り、漸く急に、以て暁に趨く。俄にして東北に声鐘あり、鐘は雨の霽るるを得て、音は清越を極め、之を聞けば又旦を待ちて興作するの思ありて、已む能はず。余性夜坐を喜む。書を燈下に攤き、之を反覆し、二更に迨ぶごとに、方めて以て当ふと為す。然れども人の喧しきいまだ息まず、而も又心文字の間に在れば、いまだ常には外静かにして内定まれるを得ず。今夕に於ては、凡そ諸の声色、蓋し定静を以て之を得たり。故に以て人心神情を澄ましめ、其の志意を発せしむるに足ること此の如し。且つ他時是の声色なきにあらざるなり。人の耳目中に接せざるにあらざるなり。然れども形物の役となり、心趣之に随へば、聡は鏗訇（詞か？）に隠れ、明は文華に隠る。是の故に物の人に益ある者は寡くして人を損する者多

し。今の声色のごとく彼に異らざるありて、一たび耳目に触るるや、窒然として我と妙合す。則ち其の鏗訇文華たる者は、いまだ始めより吾が進脩の資たらずんばあらず。而も物以て人を役するに足らざる（不は本文脱す）のみ。声絶え色泯び、而も吾の志のみ冲然として特に存すれば、則ちいはゆる志なる者は果して内なるか外なるか。其れ物にあるか物に因って以て発するを得るか。是れ必ず以て弁ずるあらん。於乎、吾是に於て弁ぜり、夜坐の力宏いかな。嗣いて斎心に当りて、更長けたる明燭の下に孤坐し、因りて以て事物の理・心体の妙を求め、以て己を脩め物に応ずるの地と為す。まさに必ず得る所あらんとするなり。夜坐記を作る。弘治壬子秋七月既望、長洲沈周」

とその文はある。「故宮書画録」所収の石渠宝笈初編御書房著録の文と、私が読んだ所では六箇所ほどに文学の異読異記があるように思う。ともあれこの軸の上半部の夜坐記と下半部の夜坐図は文・書・画三絶の高雅な境地を表現している。画の中心に端坐する人物は、この画中に登場する唯一の人物であり、あたりの寂とした風物の気配を一人で受けている。彼の画面上の大きさは僅か一糎余りだが、画面全体を支配する中心存在である。彼は深夜に起き出し、読書に倦んで坐禅し、静かに事物の理、心体の妙を求める。そして、この行為を、修己応物の拠り所とする。彼の耳には風にさやぐ樹木の音がする。その音は彼に「抗隠」の決意を一層強いものにする。犬の遠吠えは彼に防衛心を起させる。それは、当時相城のあたりには集団強盗が村々を掠奪し、暴威を振っていたからである。彼の「盗発」の詩には、窮民や暴徒が群盗となり、舟で村民の家に乗りつけて、抵抗する者を殺害し、根こそぎ略奪して行く有様を詠じているが、江南の楽天地も、官の収奪と、洪水などで、極端に疲弊状態にあった。村民は生活防衛に無力だったのである。彼は静かに明け放たれてゆく空の彼方から、時を告げる大鼓の音を聞くと、今日一日の仕事に励もうという気持を起す。しかし、それと同時に「幽憂不平の志」も又湧いてくるのであった。彼は六十六歳であった。

いかに官界からの招聘を拒否し、芸術を愛する友人たちとの気の置けない会合を楽しみ、先祖から受けた遺産による芸術的雰囲気と余裕ある生活が彼を取巻いていたところで、夜坐孤独の心を去来する社会不安と、この幽

憂不平の心は、外から内から発生する。彼はその関繋を危坐によって明らかにしようとする。そして、夜も明け放たれ、月もすでに消えた画の中に、永遠に独り危坐している。

私はこの画を見、この「夜坐記」を読み、直ちに二三の奇異の感に打たれた。まずこの屋敷は一体どこの家居なのだろうか。彼には相城の漁子沙に本居があり、その近く里余に有竹居の別荘があり、又蘇州城近くにも簡単な止宿所があったらしいことは、彼の文集で知ることができるのだが、この山に近い住居は一体どこなのだろう。湖沼地帯でクリークが網の目のように発達している彼の本居の周囲近くにこのような山や小川があるとは思われなかったのである。私のそうした疑問は、沈周自身の「題画巻」という詩で氷解した。「呉の国たる水涵す所／山有るも平衍にして巉巖なし／我家は水多く山を少く処／翠微を悵望して心に貪る所／時に能く墨に借りて足らざるを補ひ／数紙連絡して長く蓄粘す／峰巒重複して渓澨を間て／雑樹列布して楓柟多し／或は大壑を開いて山足を浸し／其の□[26]は半ば浮雲に含まる／（下略）。」彼がこの詩で自白しているように、対象をそっくりそのまま描出するのは絵画の本領ではなく、心中の真実を表現するために、逆に多くの自然を点景物として借用するにすぎないのであった。実は夜坐図も、孤独危坐の彼自身の心境を、竹樹丘山渓泉が援助護衛するために集合していたのである。

それから、「夜坐記」で描述する深夜から暁天に至る外気と音声の響を、画面からは一見捜し得ないことである。遠くの鼓楼も、犬も描かれてはいず、肝腎の月や、暁暗もない。もし私がこの画の実物に直面したら、おそらく一瞬の中に看得し聴得するに違いないが、今は彩色の画集に相対して想像をめぐらすだけである。そして思うことは、沈周は画の中心に早暁の書斎の中に危坐静慮する自分を置き、山水自然を協力者としてその上下左右に配し、心境を去来した事柄は、これを散文に托した。鑑賞者は上の「夜坐記」から中心人物に焦点をあててもよく、中心人物を凝視した後に上の説明を読んでもよいように構築したのであろう、と。

沈周の詩集には、「渓上独坐」とか「樹下独坐」の詩のように、一種の充実した反省を歌う詩がある。「渓上独坐」の「観生して吾自得し／飽飯して農功を荷ふ／盤石に双足を箕し／清流に一翁を影す／松は喬く藤は徳を輔

け／楓は老いて葉還って童し／好し詩を尋ぬるの地あり／人の杖屨の同にするなし／」の詩のように現実の生活は満ち足りている。営農生活と芸術生活が一体化したときに、沈周はそうした心情に浸ることができるのである。さらに一層悠々たる気分に心が充実し、彼をとりまく自然に融合するとき、彼の詩は輝きを増す。「畊楽」の詩に、「良家に外慕なく／躬畊して隠徳を脩む／庚庚たり東西の畝／禾に宜しく更に麦に宜し／迹労するも自らは悔いず／志静なれば乃ち云に適す／茨茆荆渓の滸／清幽水石多し／西のかた銅官の秀を挹き／右のかた太湖の碧を滙む／林春にして鳥雀鳴き／鄰並息えんと作るを戒む／和風田稗を払ひ／蕊蕊行復た粒せん／児孫帰来を候ち／竹戸燈火の夕なり／觴を引き漫ろに霑酔し／偃し息ひて北壁に就く／得る所また自ら賀し／敢て帝力忘れず／」と田園に自ら耕作し、家族の待つ家に帰って酒を飲み静かに寝につく、平凡な生活を喜び、「北寺水閣」の詩のように、静かな寺に遊び、酒を飲み茶をすすって壁に詩を題する生活を愛する。「月渓」の詩には、散策して谷川に映る月を「渓月こそ我が三友」と言い、「渓館小集」の詩には、友人集って酒宴をし、客の去った後は、腕枕をして眠る楽しさを歌う。「斎居燕坐」の詩は、雨上りの書斎で一人酒を飲み、芭蕉や梔の花を美人に見たて、「真の楽しみも酒に従って摂ぶ」と言い、「閒居四時吟」は田園の春夏秋冬の楽しみを歌う。こういう詩には、全く幽憂の影はなく、透明で明るい。そして、こうした感情は、「聴泉」の詩のように哲学的に昇華する。「若し人城市に居り／耳を以て泉を聴かんことを求めば／泉は城中に在らず／山中すなわち涓涓たらん／終日いまだ聴かんことを忘れずば／あに耳根の辺に在らんや／若し実境を以て求めば／此の泉天淵を隔てん／泉の心に在るを知らんと要めば／心遠ければ地則ち偏なり／いわゆる希声なる者／聴くなきも亦た冷然たり／」。だがしかし、沈周の日常は常にこのようではありえなかった。彼はこのような生活と心境をたえず求め続けたと思われるが、現実環境から、あるいは衰老の自省の中から、惻々と湧き上るのは「幽憂不平」の思いであった。

新興大地主の末裔として、沈周の生活内容が実際にどのような状態にあったのかは殆ど不明である。ただ、祖父の代に蓄積された財富が、父の世代に芸術品を収集して楽しみ、文人墨客を招いて詩文の宴を催し続けるに足る、豊かさを保証したことは想像できる。それが沈周の時代まで延長し得たかどうか、あるいは沈周の八十余年

の長い生涯を潤おし続けたかどうか、それは疑問である。沈周の詩には、ときどき貧苦を歌う作品がある。

江南の低湿地をしばしば襲う大洪水は、沈周たちを苦しめた。弘治辛亥(四年・一四九一)壬子(五年・一四九二)の両年に亘る洪水は特にひどかった。沈周の「十八鄰」の詩は、その悲惨な状況を描写している。洪水が長く退かない為に饑餓に迫られ、大きな子は米穀と交換し、小さな子や妻は口減らしの為によそに出し、舟を買ってその上に住む。病死者は水上に棄てるので死人が流れ漂い、食を求めて家を離れるものが続出する。政府は全く救いの手をのべず、人々は訴える所もなく飢えて離散して行く。そのようなありさまを歌っている。このような災害があっても、水が引いて麦が一面に成熟する春が来ると、「(前略)労力の苦を恤へず/自ら口腹の為に営む//彼の饑餒の日を念ひ/此に対して喜び先づ盈つ//」(「我田今有麦」)と歌うのである。しかし、「端午謾書」の詩を見ると、飢寒と、租税誅求の苛酷さの為に打ちひしがれている五十一歳(成化丁酉十三年・一四七七)の沈周の姿が彷彿とする。「(前略)周や渾て衰へ憊れ/奔波すでに便ならず//親は淹しく階上に殯し/食は水中の田に仰ぐ//借貸親戚を煩はすも/飢寒歳年を畢す//低頭白鬢を搔き/雪洟青編に在り//憂患今此の如し/聡明前に及ばず//私情は吾自ら訴ふも/公急は衆誰か憐れまん//(下略)」と歌い始め、租税を払うために辛苦する彼は、州県の下僚の誅求を嘆き、「(前略)深居俊徳を思ひ/分賛諸賢に仗る//威厳を以て恃むなかれ/須らく憂楽の懸るを知るべし//鬼を厭めんとして角黍を求め/俗と蒲鞭を話す//積雨殊に滂たり/浮雲また黯然たり//嬰を門限の外に致す/此の意誰に向ってか言はん//」と結ぶ。この詩の後半に見える風景と同様に、洪水による飢餓とその上に迫る苛歛誅求を、官憲に訴えようとする詩に「嘲雨」がある。その詩では、月が万人に平等であるのに、雨は恵みと禍を与える。政治家で例えて言えば房玄齢や杜如晦は月で、王安石は雨だ。私は今雨の災厄に遇って、見事こんな詩を作ったぞ、と慨嘆する。「憫禾」の詩では、五月の大風雨で稲が倒伏したのに、その上七月の台風に壊滅してしまった田を眺め、「(前略)何ぞ能く公租を畢へん/また饑口を彀へすなし//此に対して長き咨を発し/細雨昏酉を決す//梏しき腹は鼓するに堪へず/併せて止酒を歌はんと欲す//」と、飢饉の襲来を痛ましくも予想する。洪水台風、苛歛誅求、そのような災害が彼等を襲っても、彼は相城の地を離れられなかった。だから

三年の洪水の後、虎丘山のふもとの光福に行ったとき、洪水の影響を受けない豊かなその土地が羨しくてたまらなかった。「題光福連巻」の詩に、「(前略)山は囲み水は抱いて農桑を開き／楽土の風光真に画裏なり／三年の潢潦我に家なかりき／書を移してまた此に居らざりしを恨む／」と歌う。「割稲」の詩では、水害のあと、五人の男で水没田の稲刈りをし、漸く平年の半分の収穫だけは得られそうだと喜ぶ。しかし、夫婦二人の貧家では、稲は腐れ、水が深く、稲の頭に土が着き、収穫の可能性はない。「(前略)但だ憂ふ両口生を聊しまざるを／未だ徴租官府を慮るに暇あらず／老翁は坐して沈竈に対して哭き／婆もまた号び咷きて空釜に向ふ／雲昏く月黒く門を閉すを忘れ／壁を隔てて咆哮す一声の虎／」。

悠々とした快適な日々と、時々襲う洪水台風、徴税の苦労、それらを交互に繰り返しながら、彼の長い人生は過ぎる。彼は、親の作った家が百年も経って老朽したので、梯子に上って屋根を葺き直す。彼はこの家で成人した日々を想い出しながら、この家を維持してゆくことの困難さを考える。「補屋篇」の詩はそのような思いで歌われている。

沈周は、「夜坐記」に見えるように、しばしばわれとわが身を反省し、沈潜する。それは、誕生日であれば、次第に老いてゆくわが身の姿である。「覧鏡辞」には、鏡の中の六十歳のわが顔に驚きながら、「鏡神我に謂ふ瘦するも驚く勿れ／爾の形は尚ほ在り天情ありと／休文は帯を減ずるも固より本相／鏡を撫して始めて覚ゆ吾が心の平らかなるを／」と歌って、老いゆく心の平静を、諦観に求める沈周がいる。又「白髪」の詩は、七十五歳を過ぎた彼の心境を歌う。「七十方に半ばを過ぎんとし／余年いまだ期すべからず／堪へず青鏡の裡／すでに白頭の悲しみあるに／滄海支離の客／秋風感慨の詞／朝来まさに鑷き去らんとするも／ただ老親の知らんことを畏る／」彼の白髪の悲しみは、老いた母のためにも隠さなければならない。優しい彼の心情の反映した詩である。「老年三病」の詩は「眼花」「耳聾」「歯痛」の七律三首から成っているが、眼が霞んで紙に眼を近づけて書を書いたり、鼻に盃をぶっつけたり、書物を読むのに行を違えたり、画を描こうにも絹がぼんやり、まるで雲を隔てて月を見るようだと嘆く「眼花」の詩には、老の悲しみが自虐的に歌われている。たしかに、沈周の詩には病気

を歌うものが多い。「病懐二首」の第二首は、病みつつも冷静に自然を見ている。「膈痰漫漫として春潮に似たり／枕に伏すること旬餘気いまだ調はず／老日過ぎ易く短き晷の如く／病懐遺り難く長き宵を厭ふ／窓を隔てて忽忽として影度る鳥／瓦を鳴らして蕭蕭として風に墮つる樵／薬物尚ほ功あり全て酒を断ち／庭の柯に高く掛かる旧き山瓢／」。気管枝を患っているらしい彼は、窓をさっと飛び過ぎる鳥、屋根にかざこそと落ちる雑木の葉の音に、空しく度る病床の日々を見つめる。庭の木の梢にぶらさがる瓢に、我身を感じている。

文人画家として生きることになった沈周は、しばしば、自分を「無用の身」と感じこんでしまう。夏の盛りに雪の画を書かねばならなくなった彼は、汗を流しながら雪景色を描いている自分を笑う。「暑中写雪図」の詩に、「六月衣を添へんとして童子を喚び／自ら雪の図を画く茅屋の裏／玉花筆より出でて樹に飛上す／惨憺たる陰山乃ち是なるなからんや／老生筆を放って還って自笑す／炎と涼を顚倒して聊か爾に戯る／門前に客あり来りて借看す／満顔の黄塵汗雨の如し／」。こんなふうな自分だから、役たたずの「石田」という号を頂戴することになったと、「速楊君謙石田記」の詩に、「山中に田石有り／広衍数畝を得たり／堅く霄せて畊すべからず／無用なること実に某に類す／朋従よって称を加へ／遂に石田叟と為す／称は誉むる辞に非ざるも／吾また甘んじて其れ受く／（下略）」と歌っている。彼に石田の号を奉ったのは、三十歳も若い友人楊循吉であった。このような性向は、年老いると共に甚しくなって、自らを「顚」と感ずるようになる。「贈史癡翁」の詩に、史癡翁と自分を比較して、「（前略）翁云ふ我は呉の産／此の病痊ゆるなきを知ると／我生まれて八旬に迫び／落魄せること風顚の如し／如かず人に毀らるるも／また人の憐みを求めざるに／竹を種うるに地を借らんと欲し／書を買ふに常に田を売る／蓬蓬として白髪を被り／咄咄として青天に書す／我が顚と翁の癡と／癡顚相い比肩す／約して老兄弟と為り／逍遙して彭・籛を竟めん／」と歌う。晩年の沈周の生活程度は次第に低下してきたらしいことも併せてこの詩から想像できる。王鏊が沈周の歿後間もなく三四人の友人と相城の沈家を探ねて行った時の詩「行次相城有感[27]」を見ると、「（前略）行く行く相城に抵り／卯よりまさに酉に及ばんとす／四顧何ぞ茫然たる／天と水と合して藪と為る／茆屋幾人の家ぞ／荒蒲と衰柳とのみ／本来魚鼈の宮／自らまさに鷗鷺の有るべし／始めて田つくり

し者は誰と為す／餧なり自ら取るに非ず／有司征求を事とし／亡ぐる者八九を逾えたり／此を念ひて為に彷徨し／独立して延佇すること久し／詩を作りて風謡に当て／以て民の父母に告ぐ／」の如しであって、どうも相城は窮乏して荒廃に近い状態であったようである。沈周の家がどうなっていたか全く歌ってはないが、租税に攻められ、逃亡者の続出する村の中に、もし存在したとしても孤立した状態になっていたのであろう。文徴明の「宿相城懐石田先生」[28]の詩に、「何れの処にか重ねて処士の星を瞻ん／草堂突兀として夜燈明らかなり／風流すでに人と倶に尽き／手沢空しく憐む物に情有るを／旧に依りて短墻竹色を囲み／禁ぜず高樹の秋声を起すを／傷心未だ了らず生前の約／漁子沙頭一櫂横はる／」と、沈周亡き後の本宅を歌っているが、歿後の悲痛の情が激しているので、歿後間もない時期の作なのであろう。

沈周は「抗隠」ではあったが、彼の心の中には憂国の情が燃えていた。「間懐用郭天錫韻」の詩に、「落魄せる青衫草色に随ひ／蕭条たる白髪年華を遣る／徒労す夢寐憂国に費すを／錯認せり詩書能く起家すと／愚去客舟に忙しく剣を覓め／饑来飲を索めて誤って沙を炊ぐ／人門にもまた自ら楽地あり／酒は遶る山顚と水涯に／」と歌うのは、かつて国を憂え学問したことも徒労錯誤であった、と反芻しているのである。又、張鉄は、沈周の詩が杜甫の精神を自得していると称揚して、「後世の詩人の杜を学ぶ者少からざるも、其の志を立てず、徒らに其の詞を攻む。吾未だ其の能く杜なるを見ざるなり。石田先生は古の逸民なり。世を遯れ悶するなしと雖も、時を憂え俗を憫むの志、未だかつてこれを方寸より去らず。凡そ中に感ずるあれば、志に動かざるなく、辞に形はる。故に其の杜たる、必ずしも篇倣ひ句擬せずして、杜もとより在るなり」[29]と言っている。おそらく沈周の自白と張鉄の指摘称揚は、密接な関係を持つであろう。沈周は自分が若いころ、立身出世意欲を持った者であることを告白しているのであり、張鉄は、そういう沈周が、抗隠の生活に入った後も、若いころに抱いた憂国の情を生涯長く持ち続けたのだと言うのである。その指摘の誤りでないことは、彭礼の石田詩引[30]に、「予南畿を撫すること五年なり。弘治壬戌(十五年・一五〇二)春巡行して蘇に至り、たまたま長洲の布衣沈周啓南氏の咏磨詩一首を見、其の詞意抱負を味ひ、亟やかに召見してともに語りぬ。ただ文学に富み、詩詞に工に、画に妙なるみのならず。

其の治理に於て、尤だ彰彰然たり。予之を異とし、語ることを久しくして、ますます奇なり。其の輒く去るを欲せざるがごとくす。すなはち懇請して曰く、小人の母九十五齢なり。旦夕も離るべからず、と。」と記しているのが、最も確実な証拠である。沈周は、巡撫らの招きがあると、県の役所に出頭し、政治の論議にも応じていた。しかも被治者の立場から、為政者に適切な情報を提供していたと思われる。しかし、沈周は断乎として、召し出されなければ台院に赴かなかったのである。

四　むすび

若くして立身出世の志を断った沈周は、しかしながら州府の招きにしばしば悩み迷った。彼は母への孝養を理由に、抗隠の生活に執着し続け、ついに一度も仕官しなかった。先祖の遺産を享受しながら、芸術の探究に励み、到底応じきれないほどの揮毫の依頼を、あえて拒否せずにさばいて行った。彼の人を傷つけまいとする優しい配慮は、一見極めて消極的で無責任な人物のように彼を印象づけるが、実はそうではなくて、家族や隣人を愛するように、人々を愛し、与えられた義務には忠実であろうとするまじめさが根底にあるのであって、そのために、逆にしばしば彼自ら傷つく結果に陥ったのである。

「夜坐記」に、ふと書き遺した右のような「幽憂不平の志」は、彼が抗隠の生活を貫徹しようとする以上、生涯消えやらず彼の心の中に鬱積したであろう。芸術と営農の二本の生活の支柱は、ついに芸術の一点によって危く支えられることになった。その結果彼の名声は後世に伝わり、同時代の蘇州の文人たちの指導者として仰がれたのであった。

相城は四面大湖にとりかこまれクリークで通じた村であった。南は陽城湖、北は昆城湖、東は施沢湖、西は尚沢湯[31]。そういう低湿地を干拓して農地を獲得したのが沈周の祖先たちであった。しかし、低湿地の常として、肥沃な代りに、洪水に襲われると壊滅的打撃を受け、農民たちは餓え、土地を棄てた。そういう城外の土地に住

み、すぐれた詩文芸術の才能を発揮した沈周の長い生涯の喜怒哀楽に想いを馳せると、遠い蘇州郊外のその土地が、今も眼の前に土やクリークのにおいと共に、彷彿と浮んでくるような気がしてならない。

(1) 沈周の伝記は明史巻二九八隠逸伝に収められている。近年の伝記には、江兆申氏の「沈周」(双溪読画随筆所収)、童書業氏の「文沈与浙派的関係」(芸林叢録第六編所収)、王家誠氏の「沈周—世代隠居的画家」(中国文人画家伝所収)、周千秋氏の「明四大家之首沈石田」(中国歴代創作画家列伝所収)等多数あるが、基本的には、王鏊の「石田先生墓誌銘」(王文恪公集巻二九所収)と、文徴明の「沈先生行状」(甫田集巻二五所収)および、銭謙益の「石田先生事略」に負う所が多い。私はそれらの資料の他に、呉寛・王鏊・李東陽・楊循吉・文徴明・程敏政等の文集も参考にした。沈周の詩文集は、初刻に明の成化二十年(一四八四)鄱陽童軒序刻本、二刻に同じく弘治十六年(一五〇三)安成彭礼序刻本、三刻に同じく正徳元年(一五〇六)長洲呉寛序刻本、四刻に同じく万暦四十三年(一六一五)呉郡銭允治序刻本、五刻に同じく崇禎十七年(一六四四)常熟銭謙益序刻本があり、初刻と二刻は現在伝わらないが、他の三種は伝わっている。但し正徳本は無錫華汝徳編で「石田詩選」と題され、十巻本で、四庫全書に収められたものである。万暦本は長洲陳仁錫編で「石田先生集」と題され、不分巻である。崇禎本は銭謙益と程嘉燧の合選編で、瞿式耜耕石斎の刻に成り、「石田先生詩鈔」と題され、十巻で、その巻十に銭謙益の編集した「石田先生事略」が収められている。私は、内閣文庫蔵正徳本と、明代芸術家集彙刊(国立中央図書館刊)の「石田先生集」(万暦本に崇禎本の詩餘・文鈔・事略を加え、更に行状や墓誌銘を加えた影印本)を用いた。

(2) 王家誠「中国文人画家伝」四一頁、沈周—世代隠居的画家。

(3) 「石田先生事略」所収張時徹石田先生伝。

(4) 「石田先生事略」所収成化甲辰鄱陽章軒序。

(5) 「石田先生事略」所収阮元高賢餞別図巻。

(6) 銭謙益「列朝詩集」の小伝。

(7) 文徴明「石田先生行状」によれば、「年十五、其の父に代りて糧長となり、南京に聴宣す。時に地官侍郎崔公諱は恭、雅より文学を尚ぶ。……先生筆を援るや立ちどころに就り、詞采爛発す。崔乃ち大いに激賞を加へ、曰く、王子安の才なりと。即日檄有司に下り、其の役を蠲く」とある。

(8) 楊循吉の伝は明史巻二八六にあり、文集に松籌堂集がある。

(9) 周用は明史巻二〇二、「列朝詩集」の小伝に伝があり、呉江の人、字は行之、号は白川。弘治壬戌十五年(一五〇二)の進士。画は沈周の指導を受け、詩書をよくしたので、沈周の画に題詩を書いたりした。

(10) 「石田先生事略」所収周白川「跋呉江図」。

(11) 李開先は明史二九四に伝がある。字は石麓、江陵の人。天啓中、郷より挙げられ、崇禎年間襄陽で反乱を起した李自成に招かれたが、眼をむいて自成を罵倒し、牆に頭を打ちつけて死んだ。

(12) 美術叢書一二巻二四冊所収本による。嘉靖二十四年に書かれたもの。

(13) 江兆申氏「文徴明行誼和十六世紀的蘇州画壇」㈠～㈤台北故宮季刊抽印本一九七三。それを単行本にまとめたものが「文徴明与蘇州画壇」国立故宮博物院、民国六六年一月刊。

(14) 文徴明「題石田臨王叔明小景」。

(15) 「石田先生事略」所収。

(16) 「石田先生事略」所収田汝成西湖志餘。

(17) 「石田先生事略」所収呉寛跋。

(18) 両首ともに呉寛「匏翁家蔵集」巻二六所収。

(19) 「蘇州府志」巻五二職官一にその名がある。史簡は洛陽の人、弘治三年(一四九〇)監察御史を以て知府となり、十年に親の死去により辞任。

(20) 王恕は明史巻一八二に伝がある。字は宗貫、三原の人、「呉県志」巻六によれば弘治十六年(一五〇三)巡撫に任ぜられた。

(21) 彭礼は安福の人、成化八年(一四七二)の進士、官は左副都御史、応天巡撫となり致仕した。弘治十六年に沈石田の集に序を書いた。「呉県志」巻六によれば弘治年間に蘇州巡撫。

(22) 程敏政(一四四五―?)の伝は明史巻二八六にある。唐寅の殿試の試験官でもある。成化二年(一四六六)の進士。礼部右侍郎になった。「篁墩文集」巻五四に「与姑蘇沈啓南書」「簡沈石田」、および巻五五に「与沈石田書」がある。

(23) 「石田先生事略」所収張時徴撰沈周伝。

(24) 「石田先生事略」所収文徴明玉枕蘭亭序による。しかし「甫田集」巻二二「題玉枕蘭亭」にはこの部分を欠く。

(25) この「夜坐図」について「故宮書画録」巻五、三一六頁に石渠宝笈初編御書房著録を引いて、説明がある。夜坐記を記しているが、四聴闃然を闃然に誤り、聞風声撼竹木を聞風声に誤り、犬声訣訣を狺狺に書き改め、未常得外静而内定を未嘗に誤り、物之益於人者を益于に誤り、夜坐之力宏矣哉を巳哉に誤っている。

(26) 「石田先生集」にこの一字を欠く。
(27) 王鏊「震沢先生集」(王文恪公集)巻五所収。
(28) 「石田先生事略」引甫田集。
(29) 「石田先生事略」所収弘治甲子慈谿張鉄序華光禄汝徳刻石田分類序。
(30) 「石田先生事略」所収。
(31) 「呉県志」巻二〇相城塘の項による。呉県志は清末の編集である。にもかかわらず相城はあいかわらず低湿地で、クリークによって蘇州城その他と連っていたのである。

(昭和五十五年九月六日)